

SGRAエッセイ#552 :

ジョセフ・アンペドゥ・オフォス「飯舘村の展望：第6回SGRAふくしまスタディツアーに参加して」

◇はじめに

原発の問題点、課題は無数にあり、複雑かつ微妙にからみあっています。政府、科学者、産業界、そして一般社会がオープンで誠実な、そして協調的なやりとりをしてはじめてバランスのとれた共通の理解が得られるのです。また、こうしたやりとりには偏見があってはならないし、これに参加する各組織、各人の納得が得られるような前向きなものでなければなりません。

渥美国際交流財団関口グローバル研究会（SGRA）により企画され、NPO法人「ふくしま再生の会」の受入れにより行われたこのツアーは、私にとって目を開かせてくれる経験となりました。このエッセイで述べる私の意見は決して専門家の意見ではなく、あくまでツアーに参加した私個人の素人の見方である点をお断りしておきます。

飯舘村は福島県相馬郡にあり、2011年3月11日の福島第一原発事故の影響を受けた村のひとつです。豊かな草木、農地に恵まれていましたが、原発事故により、全住民が6年間の避難生活を余儀なくされ、お年寄りの中には見捨てられたかのように亡くなられた方もいらっしゃいました。今年4月、政府による避難指示が解除されて帰宅は許されましたが、多くの住民は未だに懐疑的で、放射能の生物学上の影響を懸念して、帰還を躊躇しているのが現状です。

◇精神的な衝撃

飯舘村の住民がこの不条理な事故により、どれほどの精神的な衝撃を受けたかを、外部の者が推し測ることはできません。人生の「終の棲家」と思って造った家を追われるように去らねばならず、避難している間も、家族とも別れ別れになりました。これらは一人一人に忘れることのできない心の傷を残したに違いありません。彼らに罪は無いが故にこれらの記憶は、彼らに、心の痛み、不安、怒り以外の何物も残すことはないでしょう。そして、この様な状況は、いくら経済的な救済、支援をして貰っても癒されるものではありません。こうした精神的な衝撃に対して慎重な対応をしなければ、その影響は次の世代に引き継がれ、後世に有害な影響を及ぼすことでしょう。

◇経済的な衝撃

飯舘村を回っていて、多くの田畑、小規模な工場が放置されているのを目にしました。稲作田が放射能汚染の為、表層土が剥がされ、もともと豊かであった農地が汚染土を詰め込んだ袋（フレコンパック）の置き場になっていました。こうした状況は、この地域の生活の糧や住民の福利にも影響し、想像以上に深刻な問題をもたらしています。避難制限は解除されましたが、多くの農家が作った野菜には、放射能汚染の作物という「とんでもない」レッテルが貼られてしまうのです。自分たちの作物を買ってくれる人がいるのか、市場があるのか、彼らも先行きを見通すことはできません。

また一方、消費者は福島地区からの作物を買う勇気があるのでしょうか？福島県からの産物は検査に合格していて安全であるという政府のお墨付きにもかかわらず、福島県以外の人達は福島産品を買おうとはしないのです。こうして住民たちは帰還したとしても、生活の糧を失う結果となります。

◇生物学上の衝撃

放射能による健康上のリスクは、避難民が飯舘村に戻るのを躊躇する理由のひとつでしょう。

飯館訪問の3日間、我々は「ふくしま再生の会」から貸与された個人用の放射線計測装置を身に着けていました。帰還が許されない一部地域を除き、再び住むことが許された地域は、放射線レベルは極めて通常でした。しかしながら、飯館村住民の多くは、帰ることを真剣に考えてはいるものの、低レベルの放射線被害を恐れ、「自分たちには分からない何かに自分たちの命をさらすリスク」をとる気にはならず、帰還をためらっているのです。

この様な状況にある村民に対し、科学的なデータによる証明だけで説得することは不可能でしょう。彼等の帰還を進めるために、将来の生活に展望を与えるにあたって、もっと幅の広いいろいろな方法、アプローチが必要となっています。

◇再活性化の活動

原発の悲劇が起きる前の、もとの飯館村に戻そうとする政府機関やNPOの様々な努力がなされています。例えば飯館村役場は新しい診療所や福祉施設などさまざまな施設の建設を進めています。現在、新しい学校を作っています。この学校は小、中学校で無償教育、無料バスがあります。「ふくしま再生の会」は、膨大な科学的なデータをもとにして、地域再生のパイロット事業や研究活動を通して、住民の帰還と新しい村づくりに向けて、必死の努力をしています。

今回のツアーでは、私たちは大根の種を植える作業のお手伝いをしました。これは収穫を目的とするのではなく、除染された畑に新しい土を入れ、できあがった大根の放射線量を計測する実験農場なのです。冬になったら、この大根が収穫されます。放射線の数値が計測され、私たちが植えた大根の安全が証明され、食卓に上ることを祈らずにはいられません。（この数値は「ふくしま再生の会」のHPに掲載されます）こうした科学的なデータをもとにした、新しい村づくりの活動に、住民たちは勇気付けられるに違いありません。

◇謝意

先ず今回の3日間のスタディツアーを企画してくださったSGRAと「ふくしま再生の会」の皆さん、ありがとうございました。また、ツアーの期間中、ずっとお付き合い頂いた飯館村の皆さんにも感謝申し上げます。私にとって今回のツアーは、原発に関連した現実、科学技術の課題、或いは社会経済学的な問題に目を向けさせてもらう機会となりました。また、このツアーを通して原発に関連した複雑さ、更には私のような科学者を含めて、関連するすべての組織や個人が、社会の安全を保障する「仕組み」を真剣に考えることの必要性を再認識させられました。

（原文は英語、河村一雄訳）

<ジョセフ・アンペドゥ・オフォス Joseph_Ampadu_OFOSU>

ガーナ出身。東京大学大学院新領域創成科学研究科先端エネルギー専攻小紫研究室博士課程。研究テーマは、未来の宇宙推進応用のためのレーザープラズマ物理とレーザー支持爆轟波。